六朝訳経の語法と語彙

森野繁夫

仏典が中国に伝来してより六朝に至るまでの訳経の歴史について、梁『高僧伝』巻三に付す論には、次のように記されている。

爰に安清・支讖、康会・竺護らに至り、並びに世を異にし時を一にし、踵を継ぎて弘賛す。然れども夷と夏と同じからず、音韻は殊隔すれば、詁訓を精括するに非ざる自りは、領会すること良に難し。

支謙・聶承遠、竺仏念・釈法雲、竺叔蘭・無羅義ら有るに属び、並びに梵漢の音に妙善にして、故に能く翻訳の致りを尽くす。一言三復して、詞旨は分明となり、然る後に更に此の土の宮商を用ひ、飾りて以って成製す。論に「方俗の語に随ひて、能く正義を示し、正義の中に於て、随義の語を置く」と曰ふは、蓋し斯の謂なり。

其の後、鳩摩羅什は、碩学にして鉤深、神鑒は奥遠なり。中土を歴遊し、方言に備悉す。復た支・竺の訳する所の文製の、古質にして未だ善美を尽くさざるを恨み、迺ち更に梵本に臨み、重ねて宣訳を為す。

彼等の仏典翻訳の実際は、同じく『高僧伝』に、

支謙以へらく、大教　行はると雖も、経に梵文多く、未だ尽くは翻訳されずと。已に方言に妙善となりて、乃めて衆本を収集し、訳して漢語と為す。（巻一・支謙伝）

竺仏念は、涼州の人、……家は世〻西河にあれば、方語に洞暁し、華戎の音義、兼ねて解せざる莫し。……趙正、諸経を出ださんことを請ふ。当時の名徳、能く伝訳する莫し。衆は咸な念を推す。是に於て（僧伽跋）澄　梵文を執り、念　訳して晋と為し、疑義を質断して、音字　乃めて明らかなり。（巻一・竺仏念伝）

蒙遜は素り大法を奉じ、志は弘通に在り、請ひて経本を出ださんと欲す。讖は土言に参らず、又た伝訳なきを以て、言の理に舛くを恐れ、翻に即くを許さず。是に於て語を学ぶこと三年、方めて訳して初分十巻を写す。（巻二・曇無讖伝）

のごとく記されている。「方言」「方語」「土言」とは、外国語に対する中国語を指すのであろうが、しかし実際は、訳者が習熟したのは或いは中国北方の言語であり或いは江南の言語であったわけであるから、中国各地方の言葉のことと考えてよかろう。さきに挙げた『高僧伝』巻三の論にも「方俗の語に随ひて、能く正義を示す」とあることからも、そのことは知られよう。

つまり彼等は、布教の対象とした各地方の言葉を用いて仏典の翻訳をしたのであり、そうしてそれは勿論、口語によるものであったろう。思うに、漢訳された経典は、中国僧を通して世俗の人々に伝えられたものであろうから、それら中国古典の教養にそれほど深くない大多数の僧のためにも、翻訳に使用される言葉はどうしても口語的なものにならざるを得なかったはずである。

それでは、翻訳に使用された文章はどのようなものであったか。つまり、どの程度に口語の語法・語彙を用いたものであったのか。以下、六朝漢語研究の面から考察を加えてみようと思う。

例として取りあげる訳経は、東晋、罽賓の人、僧迦提婆の訳になる『増壱阿含経』（大正新脩大蔵経）である。訳者の僧迦提婆は、『高僧伝』巻一に収めるその伝によれば、罽賓に生まれ、苻氏の建元中（三六五―三八四）に中国に入って布教に従事した。その後、冀州の沙門法和と洛陽に行き、数年の間、僧迦跋澄や曇摩難提らの訳した経典を研講したが、すでに「華に居ること稍く積み、漢語に博明」であったので、前人の翻訳に誤りの多いこ

とがよくわかったという。姚興が秦地の王となると、その許に赴く法和と別れて江を渡り、廬山の慧遠の所におちついて、訳経に従事した。その翻訳のさまは、「乃ち般若台に於て、手に梵文を執り、口に晋語を宣べ、華を去り実を存し、義本を尽くすを務む」という、着実なものであったという。

一、語法について

六朝期の口語的な文章としては、晋・干宝『搜神記』、宋・劉義慶『世説新語』『幽明録』、宋・王琰『冥祥記』、宋・劉敬叔『異苑』などの古小説集と、晋・陸雲の「与兄平原書」（本集に三十数首収められている）、そうして晋の王羲之・王献之らが一族の親しい者たちに与えた書簡（『法書要録』巻十の「右軍書記」に多数収められている）など、いわゆる私的な書簡があるが、以下、この訳経における語法と、これら古小説集、私的書簡の語法とを比較しつつ、訳経の文章がどの程度に口語的なものであるかを見てみようと思う。なおここでは、㈠疑問文、㈡複合語について検討を加えることにする。

㈠ 疑問文

六朝期の疑問文には、それまでに存在した形のほかに、次のようなものがある。

○疑問詞「那」「底」「云何」「何物」「何似」「何等」などを用いるもの。

○否定詞「不」「否」「未」などを文末に用いるもの。

○語気詞「為」「那」を文末に用いるもの。

○二つの対比的な語「多少」「長短」「遠近」などを用いるもの。

そうして更に、六朝期の疑問文を特徴づけるものとして、句首に次のような語を置くものがある。

①「為」「当」「為当」「為復」「為是」「当復」

②「定」「竟」「審」「頗」

③「不審」

これらは、それぞれの語を疑問文の頭にかぶせて、質疑者の気持ち、感情を細やかに表現せんとするものである。六朝期においては言語表現発達の方向として、筆者の意志、感情を相手に詳しく正確に伝えることを目的

に、口語表現が文章の中に盛んにとりこまれていたが、右にあげた①②③のごとき疑問形式もその例であろうと考えられる。そうしてこれらの疑問形式は古小説・私的書簡と訳経の両方に、その用例を見ることができる。

(1)④「為」（「為当」「為復」「為是」）

まず、古小説・書簡には次のような例がある。

○譙周有孫、高尚不出。今為所在。（王羲之書簡）――今いったいどこにいるのか？

○我向来、逢見数人、担穀従門出。若不糶者、為是何事。（「幽明録」類聚八五引）――もし米を売り出したのではないとすると、いったい何事ですか？

○今属天寒、擬適遠、為是奈何奈何。（王献之書簡）――いったいどうしたものでしょう？

○坐席竟下飲、便問人云、此為茶、為茗。（「世説」紕漏）――これはいったい茶ですか？　それとも茗ですか？

そうして訳経にも、

○見已、白世尊曰、瞿曇師主、今為所在。（六一八ページ・三段）――今いったいその居場所は？

のような例が多くみられるが、特に「為～」をくり返し用いる用法が目立つ。

○爾時、均頭白世尊言、「……若凡夫之人、便生此念、為有我耶、為無我耶、有我、無我耶。世有常耶、世無常耶。世有辺耶、世無辺耶。命是身耶、為命異身異耶。如来死耶、如来不死耶。為有死耶、為無死耶。為誰造此世、生諸邪見。為是梵天造此世、為是地主施設此世。」（七八四ページ・二段）

訳経以外の文では「為～、為～」と二度のくり返しでおわるが、訳経では「為～、為～。～、為～。為～、為～。為～、為～。為～、～。為是～、為是～」と、何度でもくり返される。これは内容に、くりかえしての質疑が多い仏典ならではの形式であろう。

㈡「当」（「当復」）

古小説・書簡の例。

○女曰、罪牽君、当可如何。（「幽明録」珠林巻三六引）――罪があなたを牽きよせている、いったいどうすることができようか？

○君服前賢弟逝没、一旦奄至、痛当奈何、当復奈何。（王羲之書簡）――いったいどんなにおつらいことか？

いったいどんなに？

これら「当」は、本来は確認の意味を表わす「為」が疑惑・仮定の意味を表わすものとして用いられたのに対して、本来は推定の意味を表わす語が、疑惑・仮定の意を表わすものとして用いられたわけである。

訳経では、次のような例がある。

○我爾時、復告目連曰、汝当有何心識、欲反此地。（七五〇・一）――お前はいったいどういうつもりがあって、ここに帰ろうとするのか？

○世尊告曰、云何尼健子、転輪聖王、当復老乎。亦当頭白歯落、皮緩面皺耶。（七一六・一）――どうかな尼健子、転輪聖王はいったい老いるのかね？　また頭が白くなり歯が抜け、皮膚がたるみ顔が皺だらけになるのかね？

(2)㋑「定」

○遜問、罪福応報、定実如何。（「冥祥記」珠林巻二一引）――罪福の報いは、結局のところ本当はどうなのか？

訳経の例、

○女曰、我定不能得成無上道乎。（七五七・三）――私は結局、無上の道を成しとげることはできないのだろうか？

「定」字が疑問の言葉の上におかれる場合について、吉川幸次郎博士は「事態の窮極の確定はいかようであるかを問う」ものと説かれ、「結局～？」と訳されている。（「六朝助字小記」）

㋺「竟」

○近書或欲留、吾甚欲与俱。而吾疾患、遅速無常。其竟云何。（王羲之書簡）――結局、どうすればいいのか？

訳経の例、

○世尊問曰、視瞻病者、竟為是誰。（七三一・一）――病人を見たのは、結局誰なのか？

「竟」を疑問文の上に加えることによって、「結局どうなんだ？」と相手を問いつめる気持ちが表わされる。要するに「定」「竟」を疑問のことばの上に冠する目的は、

疑問の強調にあると考えてよかろう。「定」ding「竟」jing という音声の面からみても、いずれも「たしかに～なのか？」「結局のところどうなのか？」という、念を押した問いかけの表現のようである。

㋩「頗」

○晋武帝問孫皓、聞南人好作爾汝歌。頗能為不。（「世説」排調）――南方の人は「爾汝」の歌を作るのが好きと聞くが、少しはできるかね？

訳経の例、

○便往至世尊所、問世尊曰、頗見婆羅門不。（五八九・一）――どうでしょう、婆羅門をお見かけになりましたか？

この「頗」についても吉川博士は、「すこしはの意を表す〝頗〟を、提出せんとする事態の上にかぶせ、事態の確実さを、あらかじめ少い目に制限しておくということは、その不確実さを一層はっきりさせる点で妥当であるばかりでなく、不確実な事態を問うべきためらいの言葉は〝頗〟po という一音を語頭に伴い、その一音を経過するだけの時間を増すことによって、語調にも一層のためらいを持ち来たし得るからである。」（「六朝助字小記」）と述べられるものである。

㋥「審」

○是時、七梵志白天師曰、審是天師乎。（七四二・三）――たしかに天師なのか？

○爾時、世尊問彼比丘曰、汝審親近諸比丘尼耶。（八一二・三）――おまえはたしかに比丘尼たちに近づいたのか？

このように「審」を疑問の言葉に冠する例については、訳経以外の用例をまだ見ない。或いは訳経だけに残存している当時の口語表現かもしれない。

(3)「不審～」

○羅君章云、不審公謂謝尚何似人。桓公曰、仁祖是勝我許人。（「世説」規箴）――どうでしょうか、あなたは謝尚をどのような人とお考えですか？

○不審定何日当北。（王羲之書簡）――どうですか、いっ

たい何時ごろ北へ行かれますか？

訳経の例、

○爾時、摩利夫人語竹膊婆羅門曰、……不審世尊有此教耶。（五七二・一）――どうでしょうか、世尊に此の教えがあるのですか？

○諸童子白仏、不審如来用父母之力、其事云何。（七四九・二）――どうでしょうか。如来が父母の力を用いるというのは、これはどういうことですか？

「不審」が無くても質疑の意は表現できるが、それを上にかぶせることによって、相手に問いかける際の唐突さをやわらげ、また相手の注意を喚起するというはたらきを、やはり持っていよう。

以上のような疑問形式は、質疑者の微妙な気持ち、感情が、的確に、表現されている点に特徴があるが、それらは当時の口語表現と推測され、従来の文章では、簡潔さを尊ぶ故に、また卑俗さをいとうが故に、用いられなかったものである。ところが六朝期においては文章の中にしばしば使用されるようになり、その傾向は古小説や私的書簡にみられ、そうして訳経においてみられるのである。(1)

(二) 複合語

複合語は、話者の意志をできるだけ正確に相手に伝えんとする願望によって作りだされ、時の経過とともに、次第に増加してきたもので、口語表現の大きな特徴といえる。普通の複合語についてはあとで「語彙」の項でふれることにして、ここでは動詞と副詞の、接尾辞をともなう複合語について述べる。

(1) 接尾辞をともなう複合動詞

この訳経では動詞接尾辞として次のようなものが用いられている。

完了（―已・―竟・―訖・―了）
定着（―著・―住）
場所（―在・―至・―到・―詣）
対象（―与・―取）
可能（―得）
方向（―出・―来・―去）

以下、このうちのいくつかについて例をあげてみる。

①完了（―已・―竟・―訖・―了）

㋑「―已」

○遙見彼土鬱然青色、見已、便問左右臣曰。（五八四・一）――見おわると、左右の臣に問ねて言った。

○爾時、世尊至迦葉所、到已、語迦葉言。（六一九・三）――やってくると、迦葉に次のように言った。

これら「―已」は、この訳経において完了形として多用されているもので、これに比べれば、「―竟」「―訖」などの用例は極めて少い。

㋺「―訖」

○俱乞食訖、還至世尊所。（七〇一・二）――俱に乞食しおえて、世尊の所へかえった。

㋩「―竟」

○観世尊食竟、王更取一小坐、在如来前坐。（六三七・二）――世尊が食べおわったのを見て、王は更めて坐を用意して、如来の前に坐った。(2)

なお、これら「―已」「―訖」「―竟」の間には、意味・用法のちがいがあるようには見えない。たとえば次のような例がある。

或復有時、比丘作是念、「我食已、与檀越説法、不使餘比丘食訖、与檀越説法。」或復有時、「餘比丘食竟、与檀越説法、不使彼比丘食竟、与檀越説法。不使我食竟、与檀越説法。」（六三三・一）――また時には、この比丘はこのように思った、「私が食べおえて、檀越に法を説き、他の比丘が食べおえて檀越に法を説くことができないようにさせよう」と。また時には、「他の比丘が食べおえて檀越に法を説き、あの比丘に、食べおえて檀越に法を説けないようにさせ、また私たちが食べおえて檀越に法を説けないようにさせたのだ」と。

この場合、「已」「竟」「訖」は全く同じように用いられており、ただ、文章に変化をもたらすことだけを目的とするもののようである。ではなぜ「已」だけが多用されているのか、ということになるが、その理由は、当時、完了を表す表現として、「―訖」「―竟」よりも「―已」の方がよく使われていた、ということではあるまいか。

さて、以上の「―已」「―竟」「―訖」について、古小

説の用例と比較してみるに、『世説』には「―已」の用例は一例もなく、「―訖」「―竟」および「―畢」が使用されているだけである。しかし他の古小説には、「―訖」「―竟」「―畢」などとともに「―已」が用いられている。

○（康法）朗等、先嫌読経沙門、無慈愛心。聞已、乃作礼悔過。（『冥祥記』珠林巻九七引）――聞きおわって、はじめて礼拝し過ちを悔いた。

○勧化家内、共加勉励、言已涕泣、因此而別。（『冥祥記』珠林巻九七引）――と言いおわると涕泣し、それをきりに別れた。(3)

『冥祥記』は、いわゆる仏教説話集であり、そこに収録されている説話は民間に伝えられたものを収集したのであろうから、より口語的な表現が見られるのも当然のことといえる。これに対して『世説』は、士人に関する逸話集であるために、あまりに口語的な表現は用いられなかったようである。

㈡「―了」

○言論弁了、而無疑滞。（五五七・二）――論じおわったが、とどこおることはなかった。

○知慧無窮、決了諸疑。（五五七・二）――知慧は窮まることなく、もろもろの疑問を解決した。

○観了身本、所謂頭那比丘是。（五五八・三）――前身を観たところ、いわゆる頭那比丘であった。

これら完了を表す接尾辞「了」の用例は、『世説』にも、その他の古小説にも見られない。従来、「了」が完了の接尾辞として用いられはじめたのは唐代のことで、多く用いられるようになったのは宋代である、(4)ということが言われており、そうすると、東晋時代の翻訳である『増壱阿含経』の用例は時期的に早すぎるものとなる。しかし、右に挙げたような例は、やはり完了の意を表す接尾辞のように思われる。

②場所「―在」

この訳経の中には、場所を示す接尾辞「在」のつく用例として次のようなものがある。

集―・飛―・遊―・没―・閉―・処―・住―・戢―・騰―・散―・居―・執―・踊―・昇―・懸―・臥―・抱―・生―・隠―・寄―・蔵―

これらの例のうち、例えば、

○復次有比丘、住在村落。（六八七・三）――また比丘がいて、村に住んでいた。

○爾時、有二千五百宝蓋、懸在空中。（七二六・三）――この時、二千五百の宝蓋が、空中に懸かった。

○此衆生、生在中国、六情完具。（七四七・二）――この人たちは、中国に生まれたので、六情が完全に備わっている。

「住在」「飛在」「生在」などは、またそれぞれ「在―住」「在―飛」「在―生」のようにも用いられている。

○爾時世尊、在迦蘭陀竹園中住。（六九四・三）――迦蘭陀の竹園の中に住んでいた。

○禿頭沙門、在我上飛。（七〇三・二）――私の上を飛んでいた。

○此衆生、在辺地生。（七四七・二）――辺地に生まれた。

言語の発達にともなって、複合語は次第に多くなってくるが、その点からいえば、「飛在―」は「在―飛」よりも新しい表現であり、この経典の翻訳された時期は、「飛在―」と「在―飛」の二つの表現が混在し用いられていたのであろう。

『世説』においては、これら「集在」「坐在」などの用例はみられず、例えば「簡文在暗室中坐」（言語）のような用例しかない。しかし『世説』以外の古小説には、「覆在」「居在」「坐在」「住在」「埋在」「隠在」「落在」「繋在」など多くの用例がみられる。すなわち、

○永嘉中、泰山巣氏、居在晋陵。（『幽明録』類聚巻一四引）――晋陵に住んでいた。

○自称姓檀、住在城側。（『続異記』広記巻四六九引）――城のほとりに住んでいると言った。

また、それと同時に、「今還在寺住」（『冥祥記』珠林巻五二引）、「後在京師住」（『冥祥記』珠林巻三六引）のごとく、「在―住」の形も用いられている。『世説』には見られない「―住」という表現が用いられているということは、士人社会の逸話集である『世説』以外の古小説の文章の方が、より口語的であることを物語るものである。

③可能「―得」

この訳経には、「加―」「誦―」「捉―」「買―」「留―」などの用例がみられる。

○今我等、宜取此食、以充虚乏、加得気力。（五八八・一）――此の食物を取って空腹を充たし、気力をつけた方がよい。

○猶如有人詣市、買得銅器。（六三二・一）――人が市場に出かけて、銅器を買ったようなものだ。

『世説』には「聚歛―」「覓―」の二例が見えるだけであるが、その他の古小説には「買―」「抜―」「捉―」「娶―」「捕―」「縛―」「聚―」「探―」「還―」「贖―」など、多数の用例がある。

○悪子於是逕至虎辺、便抜得箭。（「俗説」御覧巻八九二引）――悪子はそこですぐに虎のそばに行き、箭を抜いた。

○公因陽瞑、忽起捉得一児。（「録異伝」御覧巻九二五引）――公はそこで睡ったふりをし、急に起きて一児を捉えた。

(2)接尾辞をともなう複合副詞

接尾辞をともなう複合副詞としては「―自」「―是」「―已」「―爾」などがあるが、ここでは「自」をともなうものをとりあげる。

この訳経には「自」のつく複合副詞が多く見られる。例えば、

○今此太子、極自奇特、（七二一・三）――今この太子は、きわめてすぐれたお方で、

○時長生太子、素自聡明、未経数日、便能弾琴歌曲、無事不知。（六二七・三）――時に長生太子は、もともと聡明であって、

○是時彼衆生、便自還活。（七四七・三）――この時その衆生は、すぐに生きかえった。

のごとくであり、このほか「快―」「能―」「恒―」「常―」「善―」「当―」「既―」などがある。（ただ、「本自作罪、今自受報」（六七四・三）のように、「自」が本来の「みずから」という意味で、また或る場合には「おのずから」という意味で使用されていて、接尾辞として用いられていないものがあるから、その点は注意しなければならない。）

この「自」をともなう複合副詞は、『世説』やその他の古小説にも、

正―・深―・固―・故―・善―・輒―・便―・常―・信―・必―・毎―・恒―・本―

などが、また陸雲『兄の平原に与うる書』や王羲之・王献之の書簡にも、

正―・便―・信―・必―・已―・甚―・実―・都―・既―・徒―・殊―

などが用いられており、六朝期、とくに江南地方において広く使用されたもののようである。

いずれも「自」の持つ、「もともと」「いうまでもなく」という意味と、同時に「zi」という重みのある音調によって、一字の副詞では不十分にしか表現できなかった意味内容が表現されている。

ところで、この訳経に「―自」が多用されている理由について、いささか憶測をたくましくしてみるに、僧迦提婆の訳業は主として廬山で行われたようであるから、江南地方の口語表現が豊富に使われたにちがいないわけで、「―自」の多用も、そのことに原因がある、ということも考えられる。

以上みてきたように、訳経の語法は、六朝古小説や私的書簡に用いられている口語的表現と共通しており、さらに、古小説の中でも、より口語的な表現の用いられているものと共通している。このことは訳経の文章が、六朝期の最も口語的なものの一つであることを証しているといえよう。

この訳経のなかには、また次のような例もある。

我今当作何方、宜使留得住耶。（五九三・三）――私は今、いったいどのようにしたら留まらせることができるのか？

「留得住」は、「留」めて、その結果、そこに「住」まらせる、という意味で、「得」は結果補語のはたらきをしている。このような用例の存在は、それが結果補語の早い時期の用例であり、このころ、話しことばの中にその形が存在しており、それが訳経にそのまま用いられていることを示す。そうしてみると、この訳経の文章は、古小説や私的書簡の文章以上に口語的なものといえよ

う。より口語的という点について更にいえば、

○於梵行中、而浄其心、亦不妄語、亦不教人使行妄語。（六九六・二）

○唯願世尊、垂愍接度、使餘人抜択安処、令得無為。（七二五・三）

など、重複した使役形、また、

○得為与提和竭羅仏所見採決。（七六八・三）

という、重複した受身形の使用は、口語をそのまま写したことによるものではなかろうか。(5)

二、語彙について

この訳経に用いられている語彙を、古小説などの語彙と比較して、

(A) 訳経にみられるもので、古小説などに用例のないもの。

(B) 訳経・古小説などの両方に見られるもの。

(C) 訳経には見えないが、古小説などに用いられているもの。

にまとめて挙げてみると、次のごとくである。

（動　詞）

(A)謂言　謂名　因由　移転　穢汚　往趣　往至　益増
捐捨　濱布　嫁適　加益　解知　観看　観知　患厭
還退　合集　許放　給賜　供弁　勤修　原捨　原恕
計限　好善　好楽　至到　至湊　止住　捨離　捨除
食噉　集湊　趣向　視見　将引　修治　称可　称喚
省覲　触擾　触礙　触嬈　除治　除愈　除棄　除尽
成為　然熾　造行　断除　堕墜　歎説　暢演　鎮押
聴放　長益　墜堕　転倍　呑飲　廃却　抜済　発趣
畢尽　普満　付授　遍満　乏短　没尽　模則　与倶
来趣　来生　来入　流馳　了知　臨顧　燎燒

(B)意欲　往詣　堪能　堪任　堪忍　還復　欺誑　求覓
給与　許可　経行　経歴　検校　澆灌　趣欲　更改
行詣　将護　然可　短乏　答対　販売　退還　値遇
往止　来詣　履行　流転　流浪　禀承　恪惜

(C)往造　乞索　居往　懼怕　結束　牽挽　原免　原釈
原赦　佐助　済脱　採捕　索取　斬斫　市索　指適
終没　尋求　尋究　尋索　尋覓　済活　捜覓　啗食

渡渉　愍悼　符協　怖懼　捕捉　募索　免済　捫模
料理　臨当

（副　詞）

○よく〳〵

(A)能熟　(B)善能　能善

○ますます〳〵

(A)倍更　倍増　(B)倍復

○ともに〳〵　ことごとく〳〵

(A)尽共　皆共　各共　等共　倶共　共倶　悉共　都悉
普悉　(B)咸共　与共　悉皆　皆悉　(C)咸皆

○また〳〵

(B)還復　復還

○（その他）

(A)広普（ひろく〳〵）　初始（はじめて〳〵）　重更（さらに〳〵）　最極（もっとも〳〵）　更終（ついに〳〵）　少多（いささか〳〵）　尋時（ついで〳〵）　(C)較略（ほぼ〳〵）
嘗経（かつて〳〵）　経常（つねに〳〵）　已経（すでに〳〵）
業已（すでに〳〵）

（助動詞）

○当然・義務

(A)当可　応可　宜当　応当　要当　宜当　当応　当須
必須　(B)宜可　必応　(C)必当　必宜

○使役

(A)使令　令使　教使　(B)教令

○比況

(A)如似　像如　(B)譬如　猶如　(C)似若　似如　譬猶

○仮設

(A)設使　要使　(B)仮令　仮使　設令　若使　(C)若令　如使　借使

以上が此の訳経と古小説などに用いられている語彙の比較結果であるが、問題となるのは、(A)の中には仏典翻訳のために新しく作られた語彙があるのではないか、ということである。語法の場合は、「為」や「為是」、また「云何」を用いたくり返しの疑問形式や、「所以者何」「何以故」「於意云何」という言いまわしなどが、訳経独自のものとして工夫されてはいるが、翻訳のための語法

が新しく考え出されたということは無いようである。

しかし語彙の場合は、固有名詞や仏教用語以外の語彙についても、漢語に適当な訳語の無い場合、また同じ語のくり返しにあきたりなく感じられる場合に、新しく語彙が作られるという可能性はある。

例えば鳩摩羅什は、翻訳の文章について次のように言う。

天竺の国俗は、甚だ文製を重んず。其の宮商　体韻は、絃に入るを以て善と為す。凡そ国王に覲ゆるには、必ず徳を讃ふる有り、仏に見ゆるの儀は、歌歎を以て貴と為す。経中の偈頌は、皆な其の式なり。但し梵を改めて秦と為せば、其の藻蔚を失ふ。大意を得ると雖も、文体に殊隔す。飯を嚼みて之を与ふるに似たる有り。徒に味を失ふのみに非ず、乃って嘔噦せしむ。（「高僧伝」鳩摩羅什伝）

主として「偈頌」についての発言であるが、仏典の翻訳について羅什は、原文の音調にも注意して可能なかぎりもとの姿を保たねばならないと考えていたようである。この調子では、原文の味わいを伝えるために新しく訳語が作られたとしても不思議はない。

また此の訳経の、

長者白王、「如今羅刹鬼神、極為暴虐。唯願大王、聴放世尊、至彼世界、令彼鬼神、各各馳散。……唯願大王、聴許世尊、至彼国界。」王聞此語已、便長歎息、告長者曰、「此願極大、……今随汝意。」是時長者、極懐歓喜、往至世尊所、言「阿闍世王、以許放世尊、詣彼国界」（七二六・二）

という部分についてみるに、「ゆるす」という意味が「聴放」「聴許」「聴放」と、あたかも構成部分を入れかえて作ったかのごとき語を用いて表わされている。このうち「聴許」については他書に用例がみえるが、「聴放」「許放」については用例が無い。これは表現に変化を持たせようとしてのことであろうが、「聴放」「許放」は新しく作られた語かもしれない。(6)

三、結　語

以上、訳経の語法・語彙について、東晋・僧迦提婆訳『増壱阿含経』を例として見てきたが、そこには当時の

口語の語法・語彙が、古小説や私的書簡以上に、多く含まれているようである。したがって、これら訳経に用いられている語彙・語法を整理し、それを資料とするならば、中国中世語の研究は飛躍的な進展をとげるにちがいない。例えば、唐代になって出現したとされている語法や語彙が、すでに六朝時代に用いられていたことが証されることもあろうし、また六朝期の口語で、現在は用いられていないものが、訳経にだけ残存していることが明らかになる可能性もある。

訳経の文章は、訳者の、漢語についての知識や、古典的教養の深浅により、口語表現使用の程度、用語の雅俗に差が生ずるために、より口語的な文章から、それほどでないものまで、はば広く存在するであろうが、いずれも基本的には口語の語法・語彙が使用されているわけである。したがってそこには、中国中世語の姿が豊かに保存されており、その方面の研究者にとっては、訳経はまさに資料の宝庫といってよかろう。今後、訳経における語彙・語法の整理と、それを用いての中世語研究が切にのぞまれる次第である。

註

(1) 「六朝漢語の疑問文」（「広島大学文学部紀要」第三四巻）、「六朝漢語の研究」―「高僧伝」について―（「広島大学文学部紀要」第三八巻）

(2) この「―已」「―訖」「―竟」は、目的語がある場合には、「是時、世尊説此偈已、便従座起而去」（六三七・三）のごとく、それは動詞と接尾辞の間におかれる。

(3) また、目的語を動詞と接尾辞の間におく、「受此報已、乃遣荷去」（「冥祥記」珠林巻八六引）のような例もある。

(4) 太田辰夫「中国語歴史文法」―助動詞(2)動態―

(5) 「六朝漢語の語法」―補助動詞をともなう複合動詞―（「広島大学文学部紀要」第三三巻）、「簡文帝の詩にみえる〝―自〟」（「広島大学文学部紀要」第三二巻）

(6) 「六朝漢語の語彙」（「広島大学文学部紀要」第三六巻）、「六朝漢語の研究」―「高僧伝」について―（「広島大学文学部紀要」第三八巻）

（もりの　しげお・広島大学助教授）